林先生の思い出

吉村弓子

林四郎先生は1974年に筑波大学に着任され、設備も制度もまだ整っていない、文字通り大学の開拓期に御尽力くださった。今でこそ立派な図書館や研究棟が建ち並ぶが、当時は泥沼で長靴なしには歩けなかったという。1980年に大学院に入学した私は、そのようなキャンパスはおろか、あのダンディーな先生が長靴を泥だらけにしていらした姿など正に想像を絶することである。先生には秘密にしていたが、私は先生の装いを毎週楽しみにして講義に出席していた。

その講義は、博士課程文芸・言語研究科で開講された「言語行動論」であるが、言語学、日本語教育、国語教育を専攻する院生、そして、内地留学中の現職の国語教師の方々という、多彩な顔ぶれが毎年集まった。通年の講義のうち前半は先生の講議（80年度：漢字、81年度：実用文法、82年度：文章論における語彙調査、83年度：指示詞、84年度：文章）だったが、後半は受講生の研究発表とその質疑応答となった。研究テーマは、その年度の講義内容に必ずしも沿わなくてもよいということだったので、各人が適当な素材を選び腕によりをかけて料理したものを、毎回味わうことができた。口うるさい美食家たちは、素材が新鮮ではない、包丁の入れかたが悪い、調理法が素材の味を生かしきっていない、などと批判したり、魅力的な作品に出会うとこっそりレシピーをもらったりしたが、いつも的確な批評や感想を述べられる林先生のレパートリーの広さには、みな舌を巻いたものだ。

楽しかった盛宴も去る２月12日でお開きとなった。先生が定年退官されたからだ。６階の研究室までけっしてエレベーターをお使いにならず、さっそうと階段を昇り降りなさっていた先生がそのような年齢でいらっしゃるとは信じられない。今年の９月からは中国大陸に渡られ、北京に新設される大学院で教鞭を執られるという、益々の御活躍ぶりでいらっしゃる。残される我々は、長年の恋人に去って行かれるような心持ちであるが、いつまでも惜しんだり、寂しがったりせず、宴を再興して切磋琢磨に務めることが、なによりの御恩返しだと思う。